

# 実践10 「自ら環境に働きかけ主体的に遊ぶ」

**概要** “なぞの石を取り出す”子ども。“砂場の水流し”で思いがぶつかり合う子ども。一人一人の思いに寄り添う保育者。その子どもならではの楽しみを見つけれられるように、保育者同士の振り返りを環境の見直しにつなげています。

**ポイント** 様々に環境に働きかける子どもたちに保育者は寄り添い、一人一人の思いを感じています。その都度記録を通して、保育者同士で振り返りをし、子どもたちの興味あることから保育を展開していく工夫によっては、子どもたちの主体性が育まれていることが読み取れます。

## 大津市立伊香立・真野北幼稚園

4～5歳児

### 事例1：なぞの石を掘り出す

2月

ある日、テラス前の地面に8cm四方の石が埋まっているのを発見。(おそらく、土地や建物の境界の目印)「何これ?」と、4、5人が掘り始めた。**すぐ掘り出せると思っていたら子どもたちが、掘っても掘ってもどこまでも石。**通りすがりの先生も「それ大事なものだからアカンで!」とは言わず「たぶん、掘ったらアカンやっ…でも、面白くなりそうだし見守ってみよう」と、「うわぁ、何だろう…」「へえー面白い!」と声を掛ける。ついには5歳児も「**掘ったらマグマが出てくるで!**」と見に来る。



確かめてみよう。

『マグマ』ってなに?

えーっと。熱くてドロドロしているクマみたいなやつ。危ないで。

#### <先生たちの振り返り>

子どもたちが不思議に感じていることを大切に、向き合っていくことが探究心につながると考え、園内で共有。もちろんそれなりに確かな答えは知っているがファンタジーにはファンタジーで。子どもたちの想像は広がり「なぞ」への問いかけが始まる。

2日目。前日のメンバーが張り切って掘り始めた。かなりの時間がかかっている。「**こっち掘ってや!**」「**スプーンが届かへん!**」「**スコップとつないだらいいねん!**」「**ガムテープ!**」と**必死**。片付けの時間になっても**あきらめきれず、掘り続ける**。



水で土を流したらいいかも

細長いスコップあったらいいんやけど

穴を広げないと掘りにくい

#### <先生たちの振り返り>

“夢中になって遊ぶ”ことはとても大事。「石を掘り出すためにどうすればいい?」「どうすればうまくいくと思う?」目的を達成するために、仲間と共に最後までやり抜こうという粘り強さが感じられる。「強い子」を体現している子どもたち。

**[考察]** していることは“なぞの石を掘り出す”…それだけだが、遊びの中で子どもたちは様々なことに気づき・考え・学びや経験にしていることを改めて感じた。保育者と子ども(教える・教わる)の関係が逆転した中で子どもたちの育ちに出会い、保育者としての学びを多く得ることができた。

子どもが夢中になって遊ぶ中で、子どもが自らの知識と技術を経験から導き出し自分なりの確かな答えにしていく。ここに「科学する心」の芽が見える。興味や関心が探究心に変わっていく過程において、子どもを信じる保育者の見守りや揺さぶりが、考える力につながり、「科学する心」の芽となる。

### 事例2：砂場遊び 水流し

6月

5歳児の砂場では樋や竹樋を使って水流し遊びが盛んになっている。**友達と目的を共有し、砂場までうまく水が流れるように工夫して組み立てている。**「流していいー?」「**オッケー!**」と水を砂場に流し込み、**穴にたまった水を琵琶湖に見立てたり、島や川を作ったり**して遊んでいる。



4歳児Aさんも5歳児の様子に興味をもったのか、自分たちが遊ぶ砂場で水を流し始める。一本の樋に傾斜をつけてジョウロで水を流すAさんが、同じようにしたがる友達には「これはAのだからダメ！」と『自分だけの水流し』を楽しむ。数人の子どもが寄ってきてAさんがいない隙に水を流そうとするが、すぐに「これはAのやで！」と言われて場を離れていく。保育者は「A君、一緒にしたら大きい組さんみたいに長い水流しができるよー」と声をかけるが、Aさんには響かない。



#### <先生たちの振り返り>

あわよくば「友達と一緒に楽しんで」あわよくば「5歳児をモデルに工夫して遊べれば」という保育者の願いは子どもたちの願いと重ならなかった。Aさんの様子から、「みんなと一緒にすればいいのでは」と考え、声をかけたが響かなかった。一人一人が自分のしたいことを十分に楽しむことを大切に支えながら、その子ならではの水遊びの楽しみを見つけられるように関わることが、満足につながり、充実したものになると考え、環境を見直すことにした。



次の日はやってみたい子どもがそれぞれに楽しめるように水を流せる樋を3ヶ所準備した。さっそく朝から「これはAの水流し！」と一本を独り占めするAさん。前日にできなかった子どもたちも水流しをし始める。

Bさんが「これ、流しやすいわ！」と牛乳パックを使い始めたので、周りにいた子どもたちも同じようにし始める。保育者も「本当だ！これ流しやすい」と言って仲間入り。「水流すの楽しいよねー」と言いながら繰り返し楽しむBさん。バケツを使って流したり、友達と一緒に「せーの」と流したりして遊びは急ににぎやかになった。Bさんが「長くしよう！」と言ったことから、数人で周りにある様々なものを台

にして傾斜を作り、試したり組み替えたりしながら、それなりに長くなってきた。Cさんは同じ樋で流れてくる水を待っているDさんの「流してー」の合図で水を流し、Dさんは流れてくる水を受けることを喜んでいる。Eさんはそのやり取りをうれしそうに見ている。Fさんは水の流れに泥の塊を置いては水に流されることを繰り返し楽しんでいる。水を流すBさんも水の勢いと泥の塊の対決をするかのように流れを強くしようと考えている。いつの間にか近くにいたAさんは「僕もこっちで流していい？」と言って水を流し始める。みんなが楽しむ水遊びは、みんなが自分のしたいことを楽しんでいる場となっていた。



#### <先生たちの振り返り>

「こうしてみたい」「よし、やってみよう」と、同じ遊びの場でもそれぞれにしている遊びや楽しんでいることは違う。互いの遊びへの関心をもった子どもたちが自分たちでつながり、一緒にしていることを感じながら遊んでいた。「やってもいい？」から「僕もしたい」「こうしたい」と、主体的に関わる姿が見られた。

**[考察]** 担任はより遊びを楽しめるようにと子どもたちをつなげようと声をかけたが、「自分のしたいことを十分に楽しめるように」関わることが大切なのではないかと保育会議で振り返った。翌日、環境を再構成し、一人一人が自分のしたいことを楽しむことができるようにしたことで、子どもたちは様々な遊び方を楽しみ、自ら遊びを楽しめるものにしていった。楽しい遊びは、周りの子どもたちの興味関心と「自分もやってみたい」思いを喚起した。直接的ではなくても相手への関心をもち、楽しいことをもっと楽しくするために様々なアクションを起こす姿、ちょっとしたつながりを嬉しく感じて遊ぶ姿からは、自分なりに工夫したり考えたりする力や、友達と一緒にすることを嬉しく思う気持ちが芽生えることを感じた。思いや考えを表現しながら



遊びを進めていくことは創造性の芽生えとなる。共に遊ぶ喜び、つながり合う楽しさは、人や自然現象に対する関心や気づきとなり、豊かな感性を育む。自分のしたいことを自分のしたいようにしたかったAさんも、『みんなの』樋の水流しに仲間入りし、思いを受け止め認められたからこそ、友達の楽しい様子に気づくことができた。揺らぎ、「やっぱり一緒にのほうが楽しいから」と考えるに至ったのだろう。